

海夫通信 第3号

2009. 5. 15

特定非営利活動(NPO)法人 霞ヶ浦アカデミー

事務所 茨城県行方市浜 370 番地 1

ホームページ

<http://www.k-academy.sakura.ne.jp>

【海夫】

潮の香りをほのかに残すここ霞ヶ浦にもかつては多くの海の民がいた。海に寄り添い、潮の流れとともに暮らしていた人たちに思いを寄せて、今生きる霞ヶ浦の海夫たらんとす。

CONTENTS

- ・生き物アカデミー
- ・「飢えと米」①
- ・コラム
- ・霞ヶ浦元気シンポ参加
- ・絵画コンクール受賞作品
- ・総会日程
- ・これからの予定

5月31日(日)

霞ヶ浦アカデミー総会

総会前にイベントがあります。どなたでもご参加できます。

10時から

「魚を捕って、調べて、食べる」

霞ヶ浦にどんな魚がいるのか？投網などで魚を捕ります。そしてお昼にはエビの天ぷらをはじめ霞ヶ浦の幸をいただきます。

13時半から

「生き物アカデミー発表会」

一年を通して子供達が研究してきた成果を発表します。是非見に着てね。

15時から「総会」

会員の皆様はご参加願います。



霞ヶ浦アカデミー

「鮎の産卵調査」

水路脇に紐で吊るしておいた黒いビニールシートを水中から引き上げると表面をびっしりと覆っていた。

四月十五日の生き物アカデミーは、鮎の産卵調査を行った。水草代わりに設置されたシートに産まれたすさまじい数の鮎の卵を見、子供たちは驚きの声を上げていたが、それ以上に印象的だったのは一人の発した「かわいそう」という一言だった。

一見ゴミのように見えるシートにも鮎は卵を産む。感触が植物と似ているのだそう。だが、今回はそのみならず水路脇の雑草にまで大量の卵が所狭しと産みつけられていて、穿った見方かもしれないが鮎の必死さが伝わってくるようだった。それから水位が下がったのだろう、多くの卵は外気に晒

されて干からびていた。どちらにせよあんなに密集しては酸欠で死んでしまうという。これで霞ヶ浦の鮎は大丈夫なのだろうか。調査後、宮本先生宅にて一行はベヘレイのフライ、卵の詰まった鮎の甘露煮、ワカサギの天ぷらという霞ヶ浦産の魚たちを御馳走になった。ベヘレイは外来魚だが、キスに似て美味なものには驚く。この先も霞ヶ浦の魚が食卓に並んでいることを願う。(田中健太)

霞ヶ浦アカデミーでは、霞ヶ浦の研究をしたい子供たちを募集しています。魚を捕ったり、水を計ったり、最近できなくなってきた自然体験をしながら学ぶこともできます。

お問い合わせは生き物アカデミー事務局、浜田まで。

kaseco@y5.dion.ne.jp

野口 淳夫

家を建て清むところがこれほど人間のあり方に影響を及ぼすものなのか、これまで都会生活しか知らなかった私はいまさらながら不思議に思う。

そもそも八郷に家を建てようと土地を探し始めた理由は、父母が相次いで亡くなり実家には住めなくなるような事情が生じたからだ。最初は江戸崎とか桜川村などつくば市から離れた南の方を探していた。だから、八郷に来た理由は「そこに土地があった」かに過ぎない。

住んだ場所は北斜面の谷間で、面積は広いが日あたりはとても悪い。けれども昨日(四月二十九日)の昼間、ブルーベリーの花に囲まれた一角に椅子を持ってきて座っている。「ああなんと幸せなんだろう、おれは世界でここが一番好きだ」と心から思った。

実際のところ、そんな場所だから自分の丸太小屋以外は家一軒見えず、若葉に囲まれた空間は美しくかわしかった。

八郷に住んですぐ「つぼ」という村落共同体に入れてもらい、しばらくして柴内地区の一員として認められた。その後はすべての行事に参加してきたので、共同体の成員として認められてきたと思っっている。

さらに八郷には合田寅彦さんを中心とする町民文化雑誌「ゆう」を発行するグループがあつて、やがて編集長にさせてもらったおかげで、町内に多数の知人ができた。

そのうち寛次郎さん、橋本明子さんが主催する歎異抄の勉強会にも参加させてもらい、始めて仏教を勉強した。そんな縁もあつて寛さん合田さんを説得してスワラジ学園を設立した。

今まで経験したことのない地域での生活を送っているうちに、これまで大学の研究室と図書館の中でのみ行ってきた「学問」のあり方に疑問を感じるようになったらしい。

大学における学問は、まず大きな流れがあつてその前提の上に小発見があるというのが定説にな

っている。その流れから外れてしまうと、いかなる発見でも中々認めてもらえない。今、大学は業績主義である。業績をたくさん出すためには、流れに乗って小発見をたくさんすることが重要なのである。もうひとつ、テーマを実験室の視野からしか探そうとしない。科学の研究とはそういうものだという眼鏡を皆かけている。

ところが、ひとたびそのような眼鏡をはずしてしまつと、世の中には不思議なことが無数に存在することがあらためてわかる。

最近感じるのはヒトの疾病の多くが思ったより遺伝的であることである。癌家系というのは明らかにあるし、精神病も同様である。私たちの身体は長い間住んでいた地方の環境に適応して作られていることは当然のことである。この環境と言うのは自然環境だけではなく、社会的環境も含まれる。それが関係して遺伝的な体質が形成されるのである。

そんな思いを抱くようになった理由は、長寿化が進み、家系性のある疾病が目につくようになったか

らだ。

八郷に移住して来て十四年近くになるが、周りの人々が次々に糖尿病になっていくことに気がついた。つまり糖尿病患者が非常に多いと感じたのである。大学には三十二年間在職していたから、先生方の中にも糖尿病になられる方も出てきたが、その頻度が圧倒的に少ないように思えた。

これが事実だとするとその原因はなんであろうか。大学と八郷の農村はどのように違うかということである。もちろん食生活や労働環境なども違う。けれども大学ではあまりよくわからなかったが、八郷で糖尿病になる人は家系性があるつまり遺伝的なような感じがした。というのは八郷では家として付き合っているので、職場と違いその家のことが相当わかるからである。

一方、明治維新以来百五十年も経っているのに、日本人も随分代が代わっている。大学の先生たちも、親がやはり学者という人も大勢いるし、学者ではなくても、医者や学校の先生や役人、サラリ

ーマンの息子といった風に代々の都会暮らしの人が多い。

一方、八郷の方というと、通婚圏は大抵どりの集落とかとなりの町くらいで極めて狭い範囲で遺伝子の交換をしている。

つまり八郷の人々は代々の田舎暮らしで百姓であるが、大学の人々は代々と会暮らしの町人といえる。この百姓と町人という異なった集団が糖尿病の頻度の違いの原因なのではないかと直感的に考えた。

なぜそのように考えたかと言えば、糖尿病体質の人は飢えに強いと言われているが、八郷のような農村はつい最近までいつも飢えに苦しんでいたのだ。

それが証拠に、八郷のそこそこにある共同墓地には行き倒れやうえで亡くなった人の墓標が無数にある。

百姓は食料を作っているのに、本当は一番食える筈である。それにもかかわらず、なぜ飢えが日常に起こりやすいのであろうか。そして飢餓状態に強い体質の人々だけが生き残る事態が生じたのであろうか。

反対に、町民がたとえ丁権のような身分であってもコメを食べることができたのは江戸時代からのことである。

もしかすると、現代でも先進国には飢えが無いのに、途上国には飢えがあるような関係が都市と農村には嘗てはあったのかもしれない。

(第一話了)

「私がアカデミーへ加入したわけ」

木村 陽一

地域活動では前歴等は明かさないと暗黙のルールがあるようです。私の場合霞ヶ浦アカデミーに加入して一定の役割を果たしていく以上当然何らかの目的があるわけですが、その目的と前歴がまったく無関係とはいえないので敢えて自己紹介的などころから入ることとします。

大学で土木工学（最近では社会基盤工学、都市環境工学等と呼ぶようになっていきます）を学んだ関係で長らく国の水資源政策の一端を担う水資源開発公団（現独立行政法人水資源機構）の技術職員（俗に技術屋とか土木屋といいます）として利根川水系、淀川推計のダムや用水路の建設、管理などにかかわってきましたが、なかでも霞ヶ浦では昭和五十年代中期から平成十七年まで、他事行への移動期間を除いて通算すると二十年近く、そのうち建設事業に七年余、水の科学館管理に十三年程関わりました。霞ヶ浦を貯水池化し治水・利水機能を高める仕事や水に就いての啓発の仕事を通して、霞ヶ浦の奥の深さというものに惹かれて、水の科学館退職後も何らかの形で関わりを持ちたいとの思いはありました。しかし、現役引退後も積極的に霞ヶ浦とかかわるのは些が大変であり、市井の一人として緩い関わりで行こうと思っていた矢先に大きな転機が訪れました。それは水の科学館から縁のあった霞ヶ浦アカデミーのNPO法人化の動きに関係したこと

です。

それまでの私のNPOについての知識や認識は正直のところ貧弱なもので、どちらかといえば自分とは縁のない組織でした。NPO法が制定されて以来十年になります。NPOはまだまだ完全に市民権を持っていないのが現状ではないでしょうか。実際のところ周囲の人たちに「霞ヶ浦アカデミー」のことやNPOの話をすると予備校や福祉事業と間違われたり、シニア世代からは「カタカナ横文字名称」への拒否反応や、NPO・環境教育などというだけでなんとなく異様な集団を連想されて、その都度汗をかきながら説明にこれ努めるといった状況でした。また、水資源時代の先輩や同僚の多くも、表向きは「これからはNPOの時代だから大いに頑張ってください」といつつ、一方で「NPOは肩唾物だ、程々にやれよ」という本音も聞かれます。その本心はかつて公共事業の推進で苦労したお互いの経験に基づく先入観を引きずっているせいだろうと思えてなりません。しかし、私もスタンスを若干変えてNPOに加入した以上は敵中降下までは行かずとも、それなりの決意で組織に貢献してゆきたいと考えています。

このような背景から、私が霞ヶ浦アカデミーのなかでやりたいものが二つほどあります。第一は当アカデミーを通して霞ヶ浦水の科学館の機能充実や利・活用の促進のバックアップをすることです。同館の設立と管理運営に関係しての反省点設立時の理念が必ずしもうまく生かされていないという歯がゆさもあります。

これには十六年というときの流れのなかで初期理念の（却とか、財政難や主導的立場をとるべき行政機関）

無責任さ等さまざまな原因もありますが、今こそNPOを通じての同館の、研究・教育・具句集機能の充実に寄与し、霞ヶ浦の抱える諸問題とその解決方法の模索等をしてゆけるのではないかと考えています。

第二は霞ヶ浦というキーワードを通して水問題啓発の一端を担いたいということです。一口には水問題といっても間口が広く地球環境的な水問題から身近な飲み水の安全性まで、はたまた長い歴史を持つ河川の治水から産業と水、食料と水、水の商品化問題までありますが、NPOの利点を生かして霞ヶ浦の水の支店から多くの人たちに問題提起してゆきたいと思っています。あわせて河川とか水問題は道路と比べて行政上も、また背景にある土木工学に代表される技術も非常に地味な分野ですが、一方では環境問題につながり学際的な交流がもつと必要だと思えます。自分自身で携わった水資源開発事業の経験から、立場や利害関係の異なる他人に、自分の考えを伝え理解してもらおうことの難しさを多少は判っているのです。これらの穴を埋める働きをして行こうと思ったわけです。

去年秋の設立準備以来、役員のかたがたと接触してきましたが、それぞれ多様な分野で活躍中の方々であり、他方霞ヶ浦との関わりも様々でまさに人生いろいろで世間は広いと感じました。またNPOの場合は一企業や役所のように全員が必ずしも日筒の目的に収斂しきれないのは当然かもしれません。その中で自分は魚とりや水質試験などは得意ではありませんが、アカデミー内部の相互理解からはじめて、前述の範囲で当アカデミーの事業を楽しみたいと思っている昨今です。

「霞ヶ浦元気シンポジウム」参加報告

この4月18日土浦市民会館で霞ヶ浦の再生を沿岸住民の手で達成しようとするシンポジウムが霞ヶ浦元気シンポジウム実行委員会主催で開催され約320名が参加しました。一般の方々に加えて、那珂川、那珂川第一、大溜沼、北浦広域および桜川漁業協同組合や農業団体からの参加もあり霞ヶ浦再生を願う参加者の熱気にあふれるシンポジウムでした。嶋津暉之さんの基調講演「霞ヶ浦の水カメ化、新たな開発は必要か」の後、当団体の会員3名を含む6名の報告があり、続いて当アカデミー荒井一美理事長の司会で総合討論が行われました。

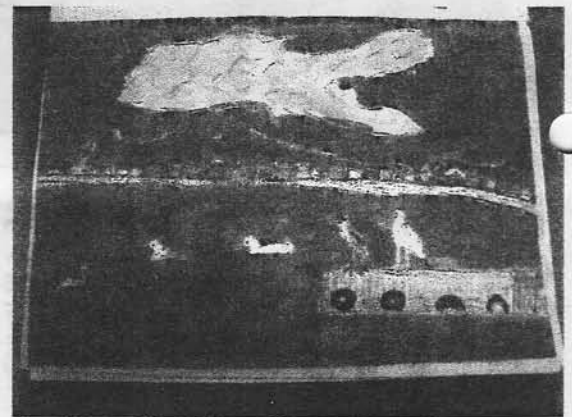
霞ヶ浦の漁業者である会員の渡辺幸司さんは、「漁業とえび煎餅で霞ヶ浦をきれいにする」と題し霞ヶ浦の水産資源の漁業者自身による水産資源管理の重要性を訴え、さらに十分に活用されていない「ザエビ」を原料とした「まじめな漁師のえびせんべい」による漁業の活性化と漁獲による水質浄化実践事例を紹介しました。

原田泰さんは「逆水門を撤去する準備はできていますか」、霞ヶ浦開発事業で問題となった常陸川水門の閉鎖に

よって発生した環境問題の解決について話し合いを継続して解決へ向かう努力が必要であることを力説しました。また、首都圏が地方を収奪する現在の政治経済的な構造に問題があり持続可能な社会の構築のためには、この構造やその基礎となる考え方を変える必要があることを主張しました。

浜田は、現在の水質保全計画事業が、効果に疑問がもたれる下水道整備、大規模浚渫、霞ヶ浦導水事業に集中しており見直しが必要であること、流入負荷削減対策がある程度効果を上げている分を大規模浚渫が帳消しにしているとのべました。さらに常陸川水門の閉鎖のCODへの影響を考慮していない現在の将来予測には問題あり、その影響評価がまず必要であると述べました。

質疑応答では大規模浚渫および霞ヶ浦導水事業への疑問、常陸川水門操作による霞ヶ浦再生の可能性、飯島博さん提案のウナギ復活による地域の活性化の可能性等が議論された。また、霞ヶ浦再生を実現するためには、水質問題を越えて地域循環型社会の構築をめざすべきとの提案があった。最後に今回のシンポジウムを基点としてさらに活動を発展させていくことを確認した(浜田篤信)。



◎霞ヶ浦絵画コンクール「200」法人霞ヶ浦アカデミー賞

《上》宮本拓海さん(玉造小) 《下》田中麻友さん(玉造中)

【新規会員】 敬称略

個人会員 磯崎 長寿

宮本 嘉博

大崎 美代

御寄付ありがとうございました

大形屋渡辺幸司様 一万六千円

総会イベントのお知らせ

霞ヶ浦アカデミー総会

五月三十一日(日)

「魚を捕って、調べて、食べる」

霞ヶ浦の魚を投網などで調査します。その後、エビの天ぷらなど、霞ヶ浦の恵みをいただきます。午後から、生き物アカデミーの子供たち、玉造ロータリークラブの研究活動発表会があります。

(タイムスケジュール)

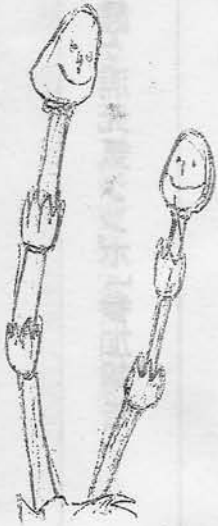
10時〜 魚の調査

12時〜 霞ヶ浦の魚を食べる

13時30分〜 生き物アカデミー研究発表

15時〜 霞ヶ浦アカデミー総会

会員のみならずは御出席ください。御出席いただけない場合は委任状の提出をお願いいたします。



五月十七日(日)午前十時から十二時
生き物アカデミー『フナの赤ちゃん調査』
場所・交流館(水の科学館内)
対象・小学生以上
講師・濱田篤信さん(霞ヶ浦アカデミー)
参加費・無料

前回、フナの産卵を確認し、そのフナの卵がどのくらい孵化し大人になっていくのか追跡して調査していきます。

五月十七日(日)十三時半から十五時
霞ヶ浦連続講座『霞ヶ浦ナマズ雑話』
場所・多目的ホール(水の科学館内)
講師・外岡健二さん
参加費・600円

(水の科学館にも入場できます)

霞ヶ浦で増えているアメリカナマズ、もともと霞ヶ浦にいたナマズの話などが聞けます。

海夫メールリングリスト御利用ください!

・メールリングリストとは登録した方が同時に電子メールを受け取る方式です。
・登録するとメールの受信・送信ができます
・霞ヶ浦アカデミーの情報をお知らせするだけではなく、意見交換の場になります。
・御希望の方は、以下のホームページアドレスよりメールリングリスト登録希望と連絡ください。
<http://k-academy.sakurane.jp>

【会員募集】

会員を随時募集しています!

入会金 1,000円

年会費 3,000円

賛助会員 10,000円(一口)

【入会方法】

氏名、住所、連絡先、会員の種類を御記入のうえ下記の宛先にお送りください。

〒311-3505 茨城県行方市浜 370-1

NPO 法人霞ヶ浦アカデミー 荒井一美

海夫通信第三号(2009.05.10発行)

【編集】野口淳夫、菊地章雄、田中健太

『海夫通信』のバックナンバーはホームページよりごらん頂けます。御不明な点が

あれば霞ヶ浦アカデミー事務局まで。

郵便振替口座
00150-7-447640
名義 NPO 霞ヶ浦アカデミー